

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：24402

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07124

研究課題名(和文) 平安朝の和歌をめぐる序と記の研究

研究課題名(英文) A Study of the Preface and Record of Waka in the Heian Period

研究代表者

山本 真由子 (YAMAMOTO, Mayuko)

大阪市立大学・大学院文学研究科・講師

研究者番号：00784901

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、平安朝の和歌制作の状況を文章で記した作品である、序と記とを対象とした。序と記とは、文体が異なり、共に漢文と仮名文の作品が残っている。

本研究では、まず、序と記および、それらと同時に作られた和歌を収集、整理した。続いて、序と記とを、漢文学と和文学双方の表現をふまえて解釈した。また、解釈に基づいて、宴集の開催年次や趣向について、従来の説に再考を促した。さらに、個々の作者や、歌人グループが制作した序について、その表現の特質と和歌史における意義とを検討した。以上の考察により、本研究は、平安朝文学における序と記の意義の一端を解明し、和歌制作の状況をより実態に即して明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research, I focused on preface(序) and record(記), which is a work written in prose about the situation of Waka(和歌) production in Heian period. The preface and the record have different styles, and both Kanbun(漢文) and Kana(仮名) sentences remain.

I first gathered and organized the preface and the record created at the same time. Then I interpreted the preface and the record based on the expression of both Chinese literature and Japanese literature. Also, based on the interpretation, I urged reconsideration of the previous theory about the holding year and taste of the banquet. In addition, I examined the nature of the expression and the meaning in Waka history about the preface produced by individual authors and poet groups. Based on the above consideration, this research clarified a part of the meaning of the preface and the record in the Heian literature, and revealed the situation of Waka production in accordance with the actual situation.

研究分野：日本文学

キーワード：和歌序 歌合日記 源順 源道濟 大堰川 前栽歌合 野宮 河原院

1. 研究開始当初の背景

(1) 「序」と「記」

「序」とは序文、前書きをいう。中国文学では、梁の『文選』に「序」の部類がある。一方、「記」とは、事柄を記録した文章をいう。唐代において古文復興の動きを背景として「記」が文体(ここでは用語や語法などの違いから区別される文章表現の種類の意でいう)として成立したとされる。

(2) 日本における序

日本では、奈良朝から、漢文で、一書の序である書序や、宴集における詩序や和歌序が制作されるようになった。平安朝になると、延喜年間(901-923)頃に和歌集に書序が冠せられ、和文(仮名文)で和歌序が書かれるようになった。これら草創期の和歌集の書序や和文の和歌序については、小沢正夫氏『古代歌学の形成』(塙書房・昭38)などによって、文章の特質、表現の典拠をめぐって論考が重ねられていた。

(3) 日本における記

日本における記は、都良香(834-879)の「富士山記」が最初期の作品である。平安朝の漢文の記については、後藤昭雄氏「白河尚歯会記考」(秋山虔篇『平安文学史論考』武蔵野書院・平21)に歴史的展開が略述されている。和文の記としては、歌合の概要や当日の様態を記した「歌合日記」が最も古いとされる。寛平3年(891)頃に催された「寛平御時菊合」に日記が附される。

(4) 和歌をめぐる序と記

和歌をめぐる序と記との関係については、早くに、その相違は「形の上の差」にあり、「事柄を叙述する点からいへば何れも同じ」とされている(玉井幸助氏『日記文学概説』目黒書店・昭20)。以降、和歌をめぐる序と記との関わりについては、殆ど論じられてこなかった。

2. 研究の目的

本研究は、平安朝の和歌をめぐる序と記、すなわち和歌制作の背景となる状況を文章で記した作品を対象とする。序と記とは、文体が異なり、共に漢文と和文の作品が残っている。本研究の目的は、個々の序と記とを、漢文学と和文学双方の表現をふまえて解釈すること、その解釈に基づき平安朝の和歌制作の背景となった状況を明らかにし、平安朝文学の内実を考察することである。また、どのような理由で序あるいは記が、また漢文あるいは和文が選択されたのかを検討することは、平安朝文学の特質を問う新たなきっかけとなるのではないかと考える。

3. 研究の方法

(1) 序と記の収集・整理および一覧表の作成

平安朝の和歌をめぐる序と記と、同時に作られた和歌を収集、整理する。それらの序と記と、同時に作られた和歌、および収載する資料を一覧できる表を作成する。

(2) 序と記の本文校訂と解釈など

和歌が多く収集できた作品や後世への影響が大きいと考えられる作品から、序と記の本文を校訂し、漢文学と和文学双方の表現をふまえて解釈を進める。その解釈に基づき和歌制作の背景となった状況を明らかにする。また、その作品においては、どのような理由で序あるいは記が、また漢文あるいは和文が選択されたのかを考察する。

(3) 平安朝の和歌制作の実態の解明

個々の作品の検討を積み重ねて、平安朝の和歌制作の実態を明らかにし、また制作の背景を文章とすにあたり、どのような理由で序あるいは記が、また漢文あるいは和文が選択されたのかを検討する。

4. 研究成果

(1) 同じ宴集で作られた2篇の序の関わり、和歌制作の背景となった状況の推定

平安朝の和歌をめぐる序を収集、整理した結果、同じ宴集で、漢文と和文で2篇の序が書かれていることが明らかになった。そこで、「齋宮規子内親王野宮庚申の和歌序二篇について」「松の声夜の琴に入る」と「初雪を翫ぶ」(『国語国文』85巻9号、臨川書店、2016年9月)において、従来の研究でなされていなかった、漢文の序の訓読、注釈を示した上で、2篇の序の関わりから、序と和歌とが作られた宴集の状況を詳しく推定した。題「初雪を翫ぶ」の漢文の序には、題「松の声夜の琴に入る」の和文の序をふまえた表現が見られる。この宴集では、予め用意された題によって、まず和文の序が書かれ、漢詩と和歌とが詠まれた。その後、余興があって漢文の序と、漢詩と和歌とが作られたのではないかと考えられる。

この宴集では、和文をふまえて、漢文が書かれたと考えられる。このことは、平安朝の漢文学と和文学との関わりを考える上で、注目される点であると思われる。また、女性が主宰する宴集において、漢詩と和歌とが詠まれ、漢文と和文とが制作されていることが明らかになった。当初予期していなかった成果ではあるが、従来の、平安朝では女性の漢詩文の受容、学習は広く行われなかったとされてきた説に、問題を投げかける事例であると考えられる。

(2) 同じ歌合で作られた序と記などの解釈、宴集の趣向の解明

口頭発表「三条左大臣殿前裁歌合の序と日記をめぐる」(大阪市立大学国語国文学会総会、2016年7月30日)では、同じ歌合で作られた漢文の序と和文の記とを、表現

の関わりをふまえて解釈した。また、序を書いた菅原文時の献じた歌題および主宰者左大臣藤原頼忠の歌を検討し、宴集の趣向を明らかにした。発表の内容を補訂して、「三条左大臣殿前裁歌合について「遣水虫の宴」の趣向」(『文学史研究』57号、大阪市立大学国語国文学研究室、2017年3月)にまとめた。

この宴集では、検討した序と記の他に、後日召された曾禰好忠の和文の序があり、参会者の和歌も100首余り伝存している。また、この宴集における歌題は「水上秋月」などの句題であり、漢文の序が書かれ、歌人は漢詩文の作品も伝存する和漢兼作の作者が多く召されており、漢詩文の影響が大きい歌合であったとされる。しかし、表現の典拠となった漢詩文が十分に解明されているとはいえない。今後は、宴集の趣向、漢詩文との関わりをふまえて、これらの序や和歌の解釈をすすめてゆきたい。

(3) 序と同時に詠まれた和歌と制作時期の推定、および序の作者の表現の特質の考察

口頭発表「源道済の詠紅葉蘆花の和歌と序をめぐって」(中古文学会秋季大会、2016年10月23日)では、漢文の序と同時に詠まれたと考えられる和歌を新たに報告し、従来推定されていた制作時期は再考を要することを指摘した。また、序の表現と作者の和歌の表現とを対照し、特質を明らかにした。さらに、発表の内容を修正し、同題の論文(『国語国文』86巻4号、臨川書店、2017年4月)にまとめた。

この宴集の主宰者は、序に「員外大納言源相公」と見える。この部分の解釈には、「相公」を敬称とする説と、参議の唐名とする説の、二つの説がある。上記の考察においては、二説の根拠を再検討したものの、解釈および主宰者、制作時期を示すには至らなかった。今後、さらに「相公」の用法、同時期の資料の収集を進め、「員外大納言源相公」の解釈を示し、主宰者、制作時期を解明する必要がある。

(4) 寺院を中心に交遊した歌人グループの制作した和歌序の収集と校訂および特質と意義の考察

村上朝の末頃から花山朝(960年-986年頃)にかけて、河原院という寺院において、庵主安法法師を中心に、交遊を重ねた歌人達が、和文の和歌序を数多く書いたことに着目して、さまざまな書に所載されるこれらの序を収集し、本文を校訂した上で、その特質に検討を加え、和歌史における意義を考察した。

(1)~(3)の研究では、宴集で作られた和歌序を考察の対象としたが、この考察においては対象を拡大し、宴集の和歌序に加えて、定数歌(百首歌)の序と、家集の冒頭に附された書序も取り上げた。また、和歌序を

所載する書それぞれの伝本を可能な限り多く参照し、同時代の資料の用語・表現をふまえて、本文校訂を行った。その上で、これらの和歌序に共通する特質を明らかにした。さらに、同時代の詩序と比較し、その影響を考察した。加えて、先行する和歌序との関わりを詳しく検討した。考察の結果は、「河原院の歌人達の和歌序 集成・校訂および特質・意義の考察」(『人文研究』(大阪市立大学大学院文学研究科紀要)69巻、2018年3月)にまとめた。

(5) 同じ場所で催された宴集における複数の和歌序の比較考察

平安京の西の郊外の大堰川を遊覧して作られた和歌序7篇を収集し、本文校訂と解釈を進めた。その上で、和歌序相互および同じ場所で詠まれた和歌や漢詩の表現などとの関わりについて検討した。

大堰川で作られた和歌は多数あり、さらに収集、整理を進める必要がある。その上で、表現の関わりや変遷をふまえて、和歌序、和歌の解釈を示したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

山本真由子、河原院の歌人達の和歌序 集成・校訂および特質・意義の考察、人文研究、査読有、69巻、2018、59-79、http://dliisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_04913329-69-59

山本真由子、源道済の詠紅葉蘆花の和歌と序をめぐって、国語国文、査読有、86巻4号、2017、83-95

山本真由子、三条左大臣殿前裁歌合について - 「遣水虫の宴」の趣向 -、文学史研究、査読有、57号、2017、1-14、http://dliisv03.media.osaka-cu.ac.jp/il/meta_pub/G0000438repository_111E0000001-57-1

山本真由子、斎宮規子内親王野宮庚申の和歌序二篇について - 「松の声夜の琴に入る」と「初雪を翫ぶ」 -、国語国文、査読有、85巻9号、2016、19-39

[学会発表](計1件)

山本真由子、源道済の詠紅葉蘆花の和歌と序をめぐって、平成28年度中古文学会秋季大会、2016

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山本 真由子 (YAMAMOTO Mayuko)
大阪市立大学・大学院文学研究科・講師
研究者番号：00784901